

1990年代のモンゴル文学の発展運動期における ホブド大学の文芸サークルの変遷について

S.ツォモルリグ

(モンゴル国立大学ウランバートル校)

ホブド大学に付属する「文芸サークル」の歴史、各時期の指導者の教員たち、この文芸サークルから生まれモンゴル文学史に独自の地位を占めた芸術家たちについて述べ、次つぎと新たに登場してきた、表現と芸術的技量の面で他者と区別される何人かの卓越した若き詩人たちについて概観し、いくつかの詩作品について分析を行った。モンゴル近代文学史に『縹渺^{ひょうびょう}たる志士 (Зүс бүгэг андууд)』¹という詩集によって知られる非リアリズム的傾向の表明者こそ、この大学の卒業生である G.バダムサンボーであり、1990年代文学の主要な代表である T.バヤンサン、D.ツォグバドラフ、バルサンギーン・ルハグワスレンらであった。さらにこの伝統が Ts.バーサンドルジ、D.エンフバヤルなどの卒業生にも引き継がれていることを取り上げた。1990年代のモンゴル文学の思想的自由、詩学思潮の刷新、芸術手法の推移において、ホブド大学の文芸サークルのメンバーは一定の地位を占めている。

「縹渺たる志士」は1990年の民主革命後に誕生した最初の前衛的なグループであり潮流である。1990年の民主革命の影響によって、モンゴル作家同盟の執行部と組織を変革し刷新する運動が突如として高揚し、作家同盟の非定例の臨時大会や特別大会が次つぎと開催されているときに、地方の一部の青年たちが会議の合間をぬって一冊の小さな本を配布していた。それが「縹渺たる志士」という題名の詩集であり、モンゴル近代文学に自らを宣言して登場してきた最初の非リアリズム派のグループであった。

このグループは、その信条と目的において、D.バトバヤル、D.オリアンハイ、バボーギーン・ルハグワスレン、B.ツェンドドーらの抽象的思潮を帯びた韻文の小さな遺産に依拠して登場してきた。そしてそのような経験を極限まで継続しようとする興味を抱いていた。

「縹渺たる志士」の主要なアピールは、他の諸流派のような理論や教条に訴えたものではなかった。むしろモンゴル文学の古い時代の固陋な規制に支配された「権威主義的な世界」で罪を犯した子供たちのように恐れおののき、臆病な姿を巧妙によそおいながら、穏健なことばで理を説いて登場してきたのである (D.ガルバートル)。

その当時は社会主義イデオロギー文学の強力な装置が全力で稼働していた時代だったので、彼らはできるだけ自分たちが罪科なき存在であるかのように紹介しようとする立場を取っていた。「いずれにしても、高貴なるみなさまの前で、私たちは畏縮しながら立っています…。私たちはいるのです」と彼らが控えめに表現したとき、その一方では、自分たちの心的苦悩と思想を信奉する尊大な歌声もそれに合わせて暗に響かせながら登場してきたのである。

¹ 海野未来雄氏の翻訳による (海野未来雄「第9章 モダニズム文学の興隆と大衆文学」『「モンゴル文学を味わう」報告書』、国際交流基金アジアセンター、1999年、125-142頁)。〔訳者の注記〕

このグループの主要メンバーは、G.バダムサンボー、M.オヤンスフ、Ts.ツェンド、B.プレブスレン、プレビーン・ルハグワスレン、T.バヤンサンなどの教員や画家を専門とする、それぞれ異なる県（アイマグ）に居住する、モダニズムや自由思潮を希求する青年たちであった。若き芸術家たちはウランバートルで知り合い、さらに共著を作ろうと合意し、最初の本をウブス県で出版した。その後、『奇異な歌（Жиг дуун）』『深層の響き（Гүний анир）』『古きままに（Адил хуучин）』など6冊の本を出版したことによって、他の諸流派よりも一貫した、協調性のある、目的を堅持したグループであることを示した。

「縹渺たる志士」のメンバーはその目的は同じであったが、手法と修辞の面ではそれぞれ独自性を保持していた。だが世界観や芸術思潮の様式は近似していた。たとえば、G.バダムサンボーはモンゴルの伝統的なセンチメンタリズム風の思潮と詩作の技法を選択し、「感覚詩、漠然とした不安の覚書、予感と覚醒という小さなジャンルの複雑で困難な道」²を選択した。それに対して、M.オヤンスフやB.プレブスレンらの詩では抽象化、隠された意味、シュールレアリズム風の書法が優勢を占め、Ts.ツェンドの作品には予兆、象徴、感覚の本質を信奉する特徴が見られる。

「現在でも詩歌の調べが絶えることなく続いていることに心からの喜びが生まれる。遠き父なる地を夢見て溜息をつくようになると、黎明の悲哀で盛装し、秋と春の寂寞たる日々から詩行を集める。学生時代、青春の活力によって増殖した壊れやすい想念の疼き、調和のとれた蒼き草原の蜃気楼のように美しく、父の眼差しのように聡明な詩を書く理由こそ、この二度と繰り返すことのない瞬間。それゆえ、一時期同僚だった教員のD.ムンフトゥルが教え子の学生バルサンギーン・ルハグワスレンと共同で出版した詩集『時代という大河の岸辺で...』の序文でソログドギーン・エンフバヤル先生は『あのひとつの時代、私たちは若かったのだ...』と意気軒昂に宣言したのである」³。

² Д.Галбаатар, “Зүс бүгэг андууд”, *Уран зохиол: Онол, түүх, шүүмжлэл (Нэвтэрхий толь)*, Улаанбаатар, 2012, 192-193 дугаар тал. (D.ガルバートル「縹渺たる志士」『文学：理論・歴史・批評（百科事典）』、ウランバートル、2012年、192-193頁）〔訳者の注記〕

³ Д.Өрнөхдэлгэр, Б.Лхагвасүрэн, “Ховд их сургуулийн “Уран зохиолын дугуйлан”-аар”, *Tagtaa Publishing*, 2019.12.31 (D.ウルヌフデルゲル、B.ルハグワスレン「ホブド大学の『文芸サークル』をめぐって」、タグター出版社、2019年12月31日)

https://tagtaa.mn/interesting/80?fbclid=IwAR0gCkpDNajRGFSIFiro_hdXauxATeHX9GcwJa13BL8P9srjTce3x1xzchg 〔訳者の注記〕